

【第七章】

十九時

「ただいま」

っと今日は伊織いないのか、たしか開店準備の講習を二十時までだから夜駅まで車で迎えに行つてあげよう。

そして伊織にお願いしてみよう。

よし、先に風呂だ。

俺がよからぬことを考えていたら伊織は電車で痴漢にあつていた。



「んふっ……くっ、やめてください」

「お前めんこいな、こんな触られてここ腫らしてたらどっちが変態か分からないな」

ぐっと男のあれを後ろから押される。

この満員電車で俺はおっさんに痴漢にあっていた。しばらくこっちのドア開かないんだよな。

俺はそれを知っていたからわざわざとっていたのにまさかのこのおっさんにいのように使われている。

助けを求めようにもみんなスマホを見ているし音も聞こえてない。

音楽を聴いているんだろうけど……。

「はあ……はあ……」

おっさんの息づかいとズボンのチャックを外していた。

「はあ……はあ……舐めてほしいけど、ここじゃ無理だよね、可愛いここに入れてあげるね♡」

入れてあげるねって表現おかしいだろ。

口元を手で抑えられながら俺はおっさんの性器を受け入れてしまうことになっ

た。

「んっ」

しかしおっさんはなぜか離れていく。慌ててズボンをあげた。ホームに降りる人が多かったのか分からないが。

新たに後ろに來た、背の高い男ににこつとされてスマホを見せられた。

『大丈夫？ 災難だったね』

おっさんをホームに降ろしたのはこの男なのかと理解した。

「あ、ありがとうございます」と礼を言おうと

「いえいえ」と返ってきた。

それからにもなく電車は俺の駅に到着した。その男も降りたようでお互いお辞儀をして俺は一度トイレに駆け込んだ。

あんなくそおっさんに揉まれたから早く家に帰って洗い流したい。

トイレを済ませ純平に『駅』と打って歩いていると

『迎えに行くよ』とあったので

『いない』と打った。

純平に触れられる前にお風呂に駆け込みたかったから。

「あれ？ 君もこの辺なの？」

！？

さっき助けてくれた男が話しかけてきた。

「ああ、はい、えっとあなたも？」

「うん、ビックリした、さっきもビックリしたけど」

「……すみません、気持ち悪いですよね」

お腹あたりの服をぎゅと掴んだ。

「あー男同士ってことか、まああってあれ？　もしかしてあのおっさんと同意だった？　そういうプレイだったのかな？」

「……え？　いえ、違います知らない人で気持ち悪かったので助けてもらえて

よかったです」

「そっか、気をつけてね」ポンと頭に手が乗かった。きっとこの人優しんだろうな。

「じゃあ俺はこの辺だから」といい近くの高級そうなマンションに入っていた。

三分ほど歩いて俺の家に到着した。

「ただいま」

「おかえ……りっんっ」

??

純平珍しく一人でやってるのか？ とその前に風呂が先、いろんなところ触られて気持ち悪い。

風呂から出るとやはりベッドでなにかをしているようだ。

「純平、一人でなにやってるんだ？」

ぎよっとした光景が目に入った。